

本講義資料のご利用にあたって

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。

著作権が東京大学の教員等に帰属する著作物については、非営利かつ教育的な目的に限り複製および再配布することができます。

ご利用にあたっては、以下のクレジットを明記してください。

**クレジット：**

**UTokyo Online Education 学術フロンティア講義 2025S 梶谷真司**






# 学問の開放性と横断性

梶谷真司

超域文化科学・比較文学比較文化  
共生のための国際哲学研究センター  
(UTCP)

EAA 東京大学東アジア藝文書院  
学術フロンティア講義 2025 —— 変わる教養、変える教養  
2025年6月20日



はじめに

## 「教養」が語られる文脈：知や教育のあり方への批判

｜

### 背景にある危機

- ・大事件：敗戦、地下鉄サリン事件、福島原発事故
  - ・閉塞感：経済的衰退、社会的停滞
  - ・専門化：偏った知識、相互の無理解、見えない全体
- 「総合的な知のあり方」= 教養
- 様々な分野の学問をどのように開き、つなげていくのか？  
(個人の素養としてではなく)

- 異なる研究分野の間をつなぐ：学際的（interdisciplinary）
- アカデミアの内と外をつなぐ：超学際的（transdisciplinary）
- 大学の社会との連携：産学連携、産官学民連携
- 研究の社会的意義：社会課題の解決、社会への貢献

専門研究とアカデミアの閉鎖性をどのように乗り越え、つなぎ、  
行き来できるようにするか？



# 1) 専門化と閉鎖性

## 制度の側面：研究者コミュニティの形成

→ 専門家としての評価が重要

(査読付き論文、専門書が評価される)

研究の主な発信先／受信元は研究者

専門家のコミュニティの存在によって研究や研究者の質や社会的信用が支えられている (ことになっている／と研究者は考えている)

## 人間関係の側面：専門家コミュニティの維持

→ 専門家どうしでいることが研究・就職のためによく、心地いい。

他の分野の人たちとの付き合いが少ない（ない）。

自分を相対化してより広い文脈（学問全体、社会全体）の中で位置づけられない。

## メンタリティの側面：専門家としてのアイデンティティ

→専門家として自分を限定する。

「責任が持てない」ので、学生指導は引き受けない。

「専門ではない」ので、発言しない。

専門家としての節度／モラル／責任感として自分の専門の枠を守る。

## 関係性の欠如

- 異なる分野の研究者の間

専門家の研究は、専門の外の人には知られない。

学際研究もジャンルが確立すると（Cultural Studiesなど）、学会ができて専門化が進む。


- アカデミアの内と外の間

学術研究は、アカデミアの外の人には知られない。

社会問題を扱っていても、アカデミアの外と関係がうすいこともありうる。

研究が役に立つかどうか以前に、そもそも成果も人も知られない。

**→学際と超学際の必要性**



## 2) 学際的研究と 超学際的研究

## 専門分野の間をつなぐ必要性と難しさ

学際的研究をしても、個々の研究者は自分の領域を守り、あくまで専門家として関わる。

研究全体としては学際的（inter-discipline）だが、個々の研究者は自分の専門の中にとどまり外へは出ない。

→既存の学問（discipline）はそのまま維持され、閉じている。

## 社会との間をつなぐ必要性と難しさ

超学際的研究をしても、各々の立場の人が自分の領分を守り、あくまでその立場の人として関わる。

研究全体としては、専門の枠／アカデミアの枠を超えて関わりあうが、個々の参加者は、自分の領分の中にとどまり、アカデミアの内と外の区別はそのまま維持される。（産学連携も同様）

## 「研究／学問のため」という大義名分の欺瞞

アカデミアによる非アカデミアの搾取

(学際的な研究では起きない問題)

アカデミアの人の利害と非アカデミアの人の利害のズレ

(類似の問題は、最近の社会科学における社会調査やフィールドワークの時にも起こる)

学際も超学際も、それだけで学問やアカデミアが開かれるわけではない。

専門化することと閉鎖的になることは本来別ではないか。

専門化しつつ、他の分野や社会とつながっていることは可能ではないか。

→どうすればそのようなことが可能になるのか？

(個人が教養を身につけるのではなく)

Two thin black lines intersect on a light blue background. One line is horizontal, and the other is diagonal, crossing it from the top-left towards the bottom-right.

### **3) 研究と アカデミアの開き方**

研究を分野の外へ、アカデミアの外へ開くのに何が必要か？

|

専門家／研究者としての立場をいったん外してみる

専門家／研究者でありつつ、専門家／研究者としては関わらない関わり方

一緒に作業する（誰の専門でもない）場／テーマを共有する

# 総合地球環境学研究所のプロジェクト

「ローカル・スタンダードとは何か

～地域社会変革のためのインクルーシヴ・アプローチの理論と実践」

哲学を中心に置いて地方創生を超学際的に行うプロジェクト  
(地域創生が専門の研究者は誰もいない)

進めていくうちに、それぞれでアイデアを出し合って、自分の専門的なスキル（専門の研究テーマとは限らない）を活かせるところでは生かす。

## 多文化共生・統合人間学（IHS）プログラム

社会に出て、学問成果を生かせる人材を育成する。

### 独自のプログラム

- ・研修：学生の専門とは直接関係がないこと、座学だけでなく現場での経験を重視

例) [科学未来館のサイエンスアゴラへの出店](#)（先端研とのコラボ）2019

[総合地球環境学研究所のオープンハウスでの展示](#)（2019）

[希望の郷 東村山・ぎゃるり でんぐり コラボレーション企画  
「ハジメマシテアナタ展」](#)

東大が出展する科学展示会サイエンスアゴラ、まもなく開催（東京大学）

[https://www.u-tokyo.ac.jp/focus/ja/articles/z0508\\_00028.html](https://www.u-tokyo.ac.jp/focus/ja/articles/z0508_00028.html)（2025年7月8日アクセス）

【開催報告】2019年度地球研オープンハウス（総合地球環境学研究所）

[https://www.chikyu.ac.jp/publicity/news/2019/0726\\_report.html](https://www.chikyu.ac.jp/publicity/news/2019/0726_report.html)（2025年7月8日アクセス）

希望の郷 東村山・ぎゃるり でんぐり コラボレーション企画「ハジメマシテアナタ展」（希望の郷東村山、ぎゃるり でんぐり、東京大学大学院 多文化共生・統合人間学プログラム）

[https://www.galeriedenguri.com/archive/exibi\\_1903.html](https://www.galeriedenguri.com/archive/exibi_1903.html)（2025年7月8日アクセス）

## 独自のプログラム

- ・自主企画：専門とは異なることを他分野の学生と共同で企画・運営する。必要な予算は大学から出す（[例](#)）。

その他（コロナ以降）

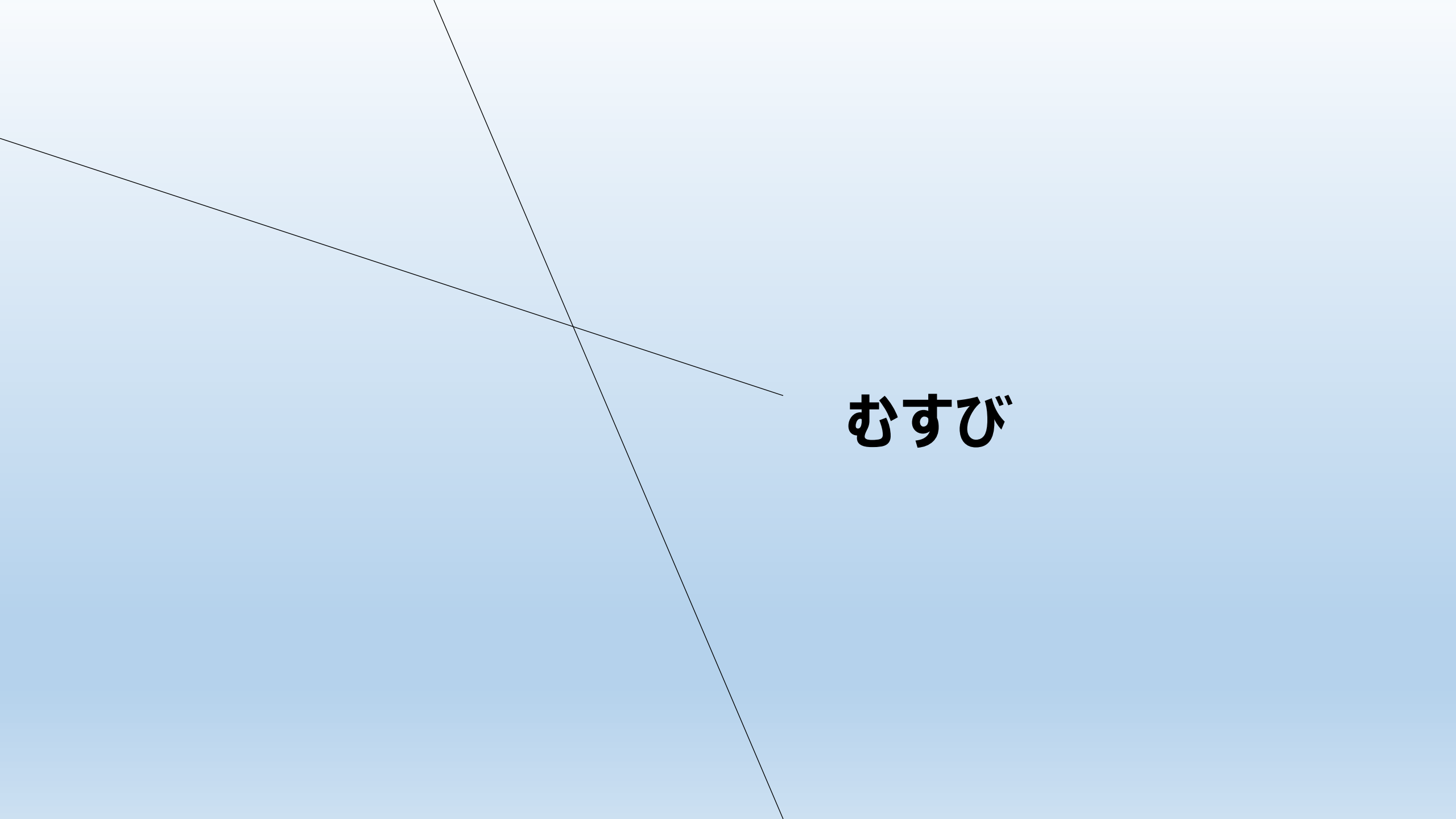
自粛する日常の不安を乗り越えるための国際的インタビュー調査

OFF LABEL（大学院の研究を社会に向けて開くイベントの開催）

リモート飲み会の分析と効果的手法の開発

→現場での経験や作業が自分の専門に何らかの仕方で影響する。

専門研究へのフィードバック、専門研究の変容



**むすび**

- **協働する現場／テーマをもつ**

超学際でなくても専門研究でも開放的でありうる。分野や社会的有用性によらない。

- **役割を固定しない**

専門分野の中にとどまらずにそのつとできることをし、専門性が生かせる時は生かす。

- **制度や価値観の転換**

アカデミアの外、専門の外との協働を推進し、業績として評価する。専門的な業績だけが重要な業績ではない。

★ 研究者がアカデミアの外で研究を続けて行くために